

〈論 説〉

A. H. Maslow による「自己実現」概念の探究プロセス — GHB ノートと 1950 年論文を中心に —

三 島 齊 紀
河 野 昭 三

- I. はじめに
- II. 「自己実現」の初出概念（1943 年）
- III. 「自己実現人」の調査研究（1945–49 年）
- IV. 「自己実現人」の共通特徴（1950 年）
- V. おわりに

I. はじめに

近時、ビジネスのグローバル化のもとで企業経営をめぐる状況が急速に変転するなか、企業経営の在り方のみならず企業に係わる人間の本来の生き方は如何なるものであるのかが問われている。そこで経営学は、社会科学の一分科である以上、ビジネスや企業組織それ自体の発展に資するような研究だけにとどまることなく、それと同時にビジネスや企業組織に係わる人々の幸福をも追究するというミッションを有するものと考えられる。その経営学がそうした社会的使命を追求しようとするとき、その理論的中核となるべき「人間観」の在り様について真剣に討議を行う必要がある。本稿において、人間に望まれる普遍的な在り方を探究した Abraham Harold Maslow (1908–70) の心理学説を検討しようとするのは、そうした理由からである。

Maslow 理論の中核をなす「自己実現 (self-actualization)」は、他の動物とは区別される人間固有の欲求概念として提示されたものであり、1960 年代以降、経営学（特に人的資源管理論における動機づけ理論）の支柱的な概念としてしばしば援用されてきた。しかしながら、経営学の一般的な教科書で紹介されているものは、1943 年初出の当該概念に関する表層的理解によるものであることに注意されなくてはならない。

経営学者 D. McGregor は、Maslow の 1954 年著作 *Motivation and Personality*¹⁾ で述べられた「自己実現」概念をベースにして、経営学的な動機づけ理論としての「Y 理論」を発表し、彼の 1960 年著書 *The Human Side of Enterprise* は学界だけでなく実業界においても一大ベストセラーとなった。しかし残念なことに、McGregor の援用した Maslow の自己実現概念は、Maslow の 1954 年著作のうち、第 5 章 A Theory of Human Motivation（初出は 1943 年）に拠るものであり、第 12 章 Self-Actualizing People : A

神奈川大学経済学部助教
甲南大学経営学部教授

1) この 1954 年著作は 1970 年に内容の補訂がなされている。Maslow の死後に出版された Maslow (1970), *Motivation and Personality (Second Edition)* がそれである。両著作はしばしば混同される場合があり、訳書を含めて明確な区別が必要である。

Study of Psychological Health (初出は1950年)²⁾における概念は殆ど無視されたといつてよい。換言すれば、McGregorの主張したY理論は、経営学によるMaslow理論の御都合主義的な摘み喰いの所産であった、と評し得るのである³⁾。

Maslowの考える本格的な「自己実現」概念は、上記Maslow(1950), Self-Actualizing People等を経て、1959年論文Cognition of Being in the Peak Experiences⁴⁾において明確化され、「B価値(Being Values)」を核にするものとして確立されている。にもかかわらず、現今の経営学者でこのことを明確に理解しているのは極めて少なく、また、このことに関する多少の理解を示す研究者がいたとしても、B価値の内容・意味については等閑視されているというのが現状である⁵⁾。

本稿では、Maslowの本格的な自己実現概念が経営学に援用できるかどうかの検討を念頭に置きながら、まずは当該概念のよりよき理解を当面の課題とする。そのひとつとして、1943年の初期的概念が提示されて以降、本格的な自己実現概念がどのようにして形成されたかを扱う。特に、Maslow自身による自己実現人の態様の特徴に関する調査日誌：GHB Notebook(1945-49年；以下、『GHBノート』と略記)⁶⁾と、その調査研究を取り纏めた1950年論文Maslow(1950), Self-Actualizing Peopleの内容をみることによって、自己実現概念が1943年と1950年とでは様相を異にすることを明らかにする。

II. 「自己実現」の初出概念(1943年)

1908年貧しいユダヤ移民の子としてニューヨーク市に生まれたA. H. Maslowは、ニューヨーク市立大学、ブルックリン大学、およびコーネル大学を経て、1928年ウィスコンシン大学に移り、そこで心理学に関する本格的な勉強を始める。その後、同大学大学院に進学し、Harry Frederick Harlow(1905-81)の下でサルに関する研究を行う。当時の彼の論文には、サル社会における性欲求と支配欲求との関係に関する調査の詳細が記録されている。1934年博士号を獲得したMaslowは、幸いにもEdward L. Thorndikeに見出されてコロンビア大学の特別研究員(任期付)の職に就いた(1935-36年)。Thorndikeに対するカーネギー財団の委託研究テーマが「人間性と社会秩序」であったこともあり、Maslowの研究関心は次第にサルからヒトへと移行していった。

1935年以降、Maslowはナチスから逃れた優秀なユダヤ人学者らが集められたニューヨークの新社会研究学院(New School for Social Research；1919年Thorstein Veblen, John Dewey等によって創設された私立の高等教育機関)やコロンビア大学において、ゲシュタルト心理学者Max Wertheimer(1880-1943)とKurt Koffka(1886-1941)、新フロイト派Karen Horney(1885-1952)とErich Fromm(1900-1980)、個人心理学派Alfred Adler(1870-1937)、脳神経医学者Kurt Goldstein(1878-1937)、および文化人類学者Ruth Benedict(1887-1948)等との交流により、人間の欲求に関する研究へ一層の関心を深めていっ

2) この1950年論文の作成時点は1943年頃との記述(Maslow(1954), *Motivation and Personality*, p. xiii)もあるが、後にみるようにGHB Notebook(Lowry(1973), pp.81-105に収録)において、1949年9月28日、自己実現に関する論文が完成し投稿した旨の記述から判断されるべきであろう。なお、1950年論文は、1970年のMaslow(1970), *Motivation and Personality (Second Edition)*では第11章に収録されている。

3) この点については、三島斉紀(2008)を参照のこと。ただし、MaslowはMcGregorのY理論を必ずしも否定的に受けとめておらず、Maslow(1970), *Motivation and Personality (Second Edition)*, p. xxiiiで示されているように比較的好意的である。しかしながら、Maslow(1969), Theory Zでは、「Y理論」はB認識をもたない自己実現の範疇のなかに含め、B認識をもった本来的な自己実現についてはそれを超えるものとして新たに「Z理論」と称することで、Y理論についてやや批判的な姿勢を示している。「自己実現人の中で「単に健康な」人々(the “merely-health” self-actualizers)は一般的に、McGregorのY理論の期待するところのものと言えよう。自己実現人の中で超越した人々(the individuals who have transcended self-actualization)はY理論に適合するだけでなくY理論を凌駕していると言うべきである。彼らは、私がここでZ理論と便宜的に称するレベルにある。Z理論としたのは、それがX理論とY理論の延長線上にあってひとつの階層を成すものとするからである。」(Maslow(1971), *The Farther Reaches of Human Nature*, pp.271-272.)

4) この1959年論文は、1956年9月1日開催のアメリカ心理学会におけるパーソナリティ及び社会心理学分科会における会長講演であり、また当該原稿が1957年10月29日付けで*Journal of Genetic Psychology*の編集委員会に受理されていることが、論文脚注に示されている。ということは、Maslowの本格的な自己実現概念は1956年時点でほぼ確立していたと考えられる。

た⁷⁾。1930年代後半での女性の「優越感や自尊心 (dominance-feeling, self-esteem)」に関する調査研究をふまえ、1941年 Maslow は、Béla Mittelmann との共著 *Principles of Abnormal Psychology: The Dynamics of Psychic Illness* の第4章において、異常人格ではなく「正常人格 (normal personality)」への研究指向を明確にした⁸⁾。

そして、Maslow は1943年論文において、「自己実現」欲求という新しい用語を加えて、精神病ではない正常な一般人間が固有に内在化させている5つの基本的欲求 (the basic needs) を指摘し、それ

5) ところで、マズロー理論に関する近時の論文である山下剛 (2008)「Maslow 理論はモチベーション論か：経営学における Maslow 理論の意義再考」は、Maslow 理論の本質を「心理的健康実現論」であると把握し、それが経営学の動機づけ理論 (人間操縦論) として矮小化されるべきものではない旨を主張している。これは Maslow 理論の正当な評価を行う上で重要な認識の提起というべきものとして注目されてよい論考ではある。しかしながら、心理的健康の中核である自己実現概念の内容についての議論が殆どないこと、動機理論と動機づけ理論の区別があいまいであること、引用で原著頁が表示されず、また引用において1954年著作と1970年著作とが混同されていること、さらにバーナード理論への安易な接合がなされていること、等々の難点を内包している。また、この山下の主張は彼のオリジナルとはいえ、既に同様の指摘が存在していることに注意したい。すなわち、金井壽宏 (1999)『経営組織』(44頁)では「自己実現はモチベーション (動機づけ) の問題ではない」とされており、また金井壽宏監訳 (2001)『完全なる経営』(423頁)でも「マズローを知っているひとの何人が、自己実現は、畢竟のところモチベーションの問題ではないと深いレベルで知っているのだろうか」との解説が付されている。山下のマズロー解釈は一見オリジナルがあるかのようであるが、マズローを少しでも深く読んだ人々には既知の事柄を、単にリフレインしたに過ぎない。

さらに、金井による解説も実は Maslow 自身の言にしたがったものでしかない。その典拠を挙げておこう。Maslow の1954年著作 *Motivation and Personality* の第12章 (初出は1950年論文)において、「われわれは、自己実現者のために特別に、普通とは異なる動機の心理学、すなわち、欠乏動機に関するものではなく、表現動機、または成長動機の心理学を構築しなければならぬであろう。… (中略) …おそらく動機づけという概念は、非自己実現者へのみ適用されるべきであろう (Perhaps the concept of motivation should apply *only* to non-self-actualizers.)」(Maslow (1954), *Motivation and Personality*, p. 211.) とされ、また「欠乏動機と成長動機の相違は、もし動機づけということが新しい意味に解釈されるのであれば別だが、そうでなければ自己実現そのものは動機づけによって生じた変化ではないということの意味する。自己実現、すなわち有機体の潜在可能性を最大限に発揮し実現するということは、報酬を通じての習慣形成や連合ではなく、むしろ成長や成熟と同じものなのである。言い替えれば、それは外部から獲得されるものではなく、既に内在していたものが開花されるというものである。(it is not acquired from without but is rather an unfolding from within of what is, in a subtle sense, already there)。自己実現レベルでの健康かつ自然な自発性は、動機づけられるものではない。それはまさしく動機づけとは相矛盾するものなのである (Spontaneity at the self-actualizing level — being healthy, natural — is unmotivated; indeed it is the contradiction of motivation.)」(Maslow (1954), *Motivation and Personality*, p.296.) と明記されている。このように、自己実現はいわゆる外発的な動機づけとは異質なものであることは、山下の解釈や金井の解説によらずとも、Maslow 自身の考え方であったということに留意されなくてはならない。

なお、Maslow 理論はモチベーション理論ではないとした山下の指摘には一定の啓蒙的意義は認められ得るとしても、それにとどまるのみでは経営学の発展には寄与しない。すなわち、そのことをふまえながら、マズロー理論自体に関する一層の研究と当該理論の経営学的意義が探求されなくてはならないからである。その場合、山下のように性急にバーナード理論 (特に、準則コンフリクト論) へ飛躍するのではなく、それ以前に、Maslow 理論それ自体に関する一層深い考察、すなわち Maslow の自己実現の本来の概念とは何か、その概念はどのようなプロセスで形成されたのか、その概念は心理学的あるいは経営学的に正当に取り扱うことができるのか、その概念は動機づけと本当に矛盾するのか、その概念のもつインプリケーションとして、個人・企業・社会等に対する意義は如何なるものがあり得るのか、等々が考究されなくてはならないのである。Maslow 理論に関する深層的な理解が行われずに放置されるのであれば、かつて McGregor の犯したような Maslow 理論の表層的な摘み食い (肯定的であれ否定的であれ) が再び繰り返されることとなり、経営学の発展には何も寄与しないばかりか、むしろ発展の阻害とさえなることが懸念される。

ところで、Edward L. Deci (1975), *Intrinsic Motivation* で提示されているように、外的報酬とリンクした外発的な動機づけよりも、むしろ外的報酬から切り離された人間固有の自発的な内的動機に注目する考え方がある。Deci の主張する内発的動機理論は、人間行動の大部分は自発的であること、人間は環境との係わり合いにおいて有能で自己決定的でありたいとする内的な生得的欲求を有することを前提にしている点で、Goldstein 学説に近く、また Maslow 理論に対し比較的好意的なのである。しかし Deci 理論において議論されている Maslow の自己実現概念は1943年時点のもので、1959年以降の本格的な概念内容 (B 価値) に関しての考察は何らなされていない。Deci の主要な関心が、人間の自発的行動はなぜ・どのようにして起きるのかにあったことから、Maslow の自己実現 (潜在能力の十分な発揮など) は Deci の主張する有能さと自己決定という内発的動機からの「分化」として認識されるにとどまっている。しかしながら、内発的動機に関する Deci の研究は、基礎理論としての「動機理論」を、応用理論としての「動機づけ理論」へ転化させるというインプリケーションを内包させている。同様に Maslow 理論についても、内発的な自己実現欲求についてそれを援助・促進するという応用的側面が含意されていると考えることができれば、Maslow 理論は動機づけ理論 (いわゆるモチベーション理論) にも成り得るということになる。確かに Maslow 理論は旧来のような外発的報酬に基づく動機づけ理論と言えるものではないが、人間固有の内発的欲求の発展に関する動機理論であり、かつ自己実現という内発的欲求を促進させる応用的な動機づけ理論でもあると考えることが可能である。なお、「motivation theory」の訳語としては、「動機理論」または「動機づけ理論」のいずれかを付すべきであり、「モチベーション理論」としてカタカナ表記を充てることは誤解を生みやすいように思われる。Maslow 理論については、まずは「動機理論」として体系的な精査をもとに正確な内容理解を行い、その上で、評価が積極的であれ消極的であれ、「動機づけ理論」になり得るかかどうかの正当な判断を行う必要がある。本稿は、Maslow 理論のそうした慎重な取り扱いの一階梯にほかならないのである。

6) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.81-105.

7) Hoffman (1988), *The Right*, pp.86-115.

らが逐次的に展開するという仮説を提唱した。すなわち、生命維持に直接的に係わる「生理的欲求 (the 'physiological' needs)」、環境からの脅威に対する自己保存としての「安全欲求 (the safety needs)」、情動的な結合・愛の授受という「愛の欲求 (The love needs)」(1954年以降、「所属と愛の欲求 (the belongingness and love needs)」へ改称)、自尊・自律に関する「承認欲求 (the esteem needs)」、そして最終段階としての「自己実現欲求 (the need for self-actualization)」の5つであり、これらは出現の優勢度 (prepotency) 順に「階層 (the hierarchy of basic needs)」をなすとした。すなわち、人は生理→安全→愛→承認→自己実現という優勢度順に従って欲求が満たされていくという、いわゆる「欲求5段階説」を提示したのである。

1943年論文で、人間欲求の最高段階にあるとされた「自己実現」の概念は、次のようであった。下の〔イ〕は Maslow (1943a), Preface to Motivation Theory ; 〔ロ〕は Maslow (1943b), A Theory of Human Motivation からのものである。

〔イ〕「自己充実 (self-fulfillment)」。

「自己表現 (self-expression)」。

「自分自身の根本をなす固有なパーソナリティを実現すること (working out of one's own fundamental personality)」。

「潜在的パーソナリティの実現 (the fulfillment of its potentialities)」。

「パーソナリティ能力の活用 (the use of its capacities)」。

「自分自身の可能性を最大限にしようとする性向 (the tendency to be the most that one is capable of being)」。

〔ロ〕「たとえこれら (生理的, 安全, 愛, 承認…引用者注) の諸欲求が充足されたとしても, 自分自身に相応しいことを行っていないければ (unless the individual is doing what he is fitted for), 常ではないが, しばしば新しい不満や不安 (a new discontent and restlessness) が直ちに芽生えてくるのを感じる」こと。

「音楽家は音楽を作り, 画家は絵を描き, 詩人は詩を創らなくては, 彼らは本当に幸福であるとはいえない (A musician must make music, an artist must paint, a poet must write, if he is to be ultimately happy.). 人は本来的に成り得るものに成らなくてはならない (What a man can be, he must be.)」こと。

「自分自身を十分に発揮したいという願望, 即ち, 潜在化している自分自身を顕在化させたいとする性向 (the desire for self-fulfillment, namely, to the tendency for him to become actualized in what he is potentially)」。

「ますます自分らしくになりたいという願望, かけがえのない存在に成りたいという願望 (the desire to become more and more what one is, become everything that one is capable of becoming)」。

8) Maslow はこの 1941 年著作 (pp.38-43) において, 正常人格を構成する特徴として次の 12 点を挙げている。(イ) adequate security feelings, (ロ) adequate and firmly based self-esteem, (ハ) adequately free expression of the personality (naturalness of behavior, spontaneity), (ニ) adequate self-knowledge, (ホ) adequate and efficient contact with and use of reality, (ヘ) adequate emotionality, (ト) adequate integration and consistency of personality, (チ) adequate life goals, purposes, ambitions, (リ) ability to satisfy the social requirements of the group; adequate inhibitions and social adaptability, (ヌ) adequate emancipation from the group or culture, (ル) ability to accept love, affection and support, (オ) adequate bodily desires and the ability to gratify them. これらと, 基本 5 欲求との関係については, 三島斉紀 (2005a), 209-215 頁を参照のこと。

上のように Maslow は、正常人である人間一般には共通した基本的欲求があり、それらは優勢度順に表出し、その最終段階では各人が自分らしい個性を発展させる自己実現欲求なるものを措定した。しかし、この欲求5段階説を援用した経営学者の殆どが誤解しても止むを得ないほどに、1943年時点での自己実現概念は、ドイツ人脳神経学者 K. Goldstein が第一次世界大戦での脳損傷患者に関する研究から、患者が外部環境に適応しようとする行動（生体が外界とうまく折り合いを付けていくこと：coming to terms of the organism with the environment）のことを「自己実現（self-actualiation ; Selbstverwirklichung）」と名付けたことに由来するのであり、Maslow はそれを脳損傷患者ではなく正常人に対して、「一層特定の限定的な形（in a much more specific and limited fashion）」で適用できないかと考えたのである。⁹⁾

この後、Maslow は、独自の「自己実現」概念の構築に向けて努力していくことになるが、1943年論文でそのことを次のように記している。すなわち、「自己実現は今後一層、調査研究すべき挑戦的な課題（a challenging problem for research）」¹⁰⁾であり、「ここで提示される理論は、将来の研究のための計画や枠組み提示として考えられるべきものであって、本理論が有効か無効かを決めるのは、現在利用できる事実や証拠ではなく、未だ為されていない調査研究に依存する（The present theory then must be considered to be a suggested program or framework for future research and must be stand or fall, not so much on facts available or evidence presented, as upon researches yet to be done,……）」¹¹⁾と。

Ⅲ. 「自己実現人」の調査研究（1945-49年）

自己実現に関し初期的・暫定的な概念を提示してから約2年後、Maslow は、自己実現とは何かについて具体的な研究を進展させるべく、自分自身に対し次のように言い聞かせている。すなわち、「数年間やきもきしたのち、私は GHB 研究を推進し、その研究を一層公式的かつ厳密に行うことを決めた（After fussing along for some years, I have decided to dig into GHB research and do it more formally and rigidly.）。とはいえ、この研究は困難だらけで問題が山積している。そのような現状ではあるが、克服しがたい困難はできるだけ認識するよう努めるとして、兎にかく前に進もう」¹²⁾と。

そこで、以下、彼独自の「自己実現」概念の探究プロセスを示す 1945年5月6日から49年12月20日の約4年半にわたる調査日誌『GHB ノート』（GHB とは、Good Human Being の略語）の概要をみるとにしよう。

9) Maslow (1943b), A Theory, p. 382. 健常者にとっては、脳損傷患者のように外界（脅威）に対しての自己保存（self-preservation）だけでなく、これに加え、脳損傷患者では見られないような外界を概念的・抽象的に把握・克服しようとする自発性（spontaneity）や創造性（creativity）が認められところから、そうした人間の内在的性向をして Goldstein は自己実現と呼称した（Goldstein, (1940), pp. 111-114, p. 170.）。Maslow による用語の借用については、次のような Goldstein の記述が参考になる。「生体は一定の潜在的可能性（potentialities）を有する。そうであるがゆえに、生体は潜在的可能性を現実化・実現しようとする欲求（the needs to actualize or realize them）をもつ。このような欲求の充足（the fulfillment of these needs）が生体の自己実現を表すのである。かくなる欲求に動かされると、われわれは自分自身が能動的なパーソナリティ（active personalities）の持ち主であることを経験するのであり、自分自身の特性に一致しないと思われる動因によって受動的に強制されることはない。（改行）このような自己実現の特殊形態は、不完全な行為を完全なものにしようとする欲求（the need to complete incomplete actions）といえる。この性向は子供における活動の多くを説明するものである。…（中略）完成と完璧（completion and perfection）を求めていると考えられる。そうしたことに向かう駆動力は、喉の渇きであれ飢えであれ不完全さを経験すること、あるいは、能力範囲内と思えるいかなる行為をも完遂できないことから生じる。その目標は課業を完遂することにある（the goal is the fulfillment of the task）。完成に近づくほど、それを成し遂げようとする欲求は強くなる。このことは、子供でも大人でも同様に当てはまる。」（Goldstein (1940), pp.146-147.）

10) Maslow (1943b), A Theory, p.383.

11) Maslow (1943b), A Theory, p.371.

12) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.81.

[1945年5月6日]¹³⁾…… GHB 研究は、まず調査対象者として「潜在的な GHB と思われる学生 (students who look like potential GHB)」を集め、いくつかの方法でふるいにかけて後で、彼らに関する記録を取った。すなわち、①外見的な判断によって選抜し、②彼らの安定度スコア (security scores) を調べ、③1時間程度の面談 (interview) を行い、④その面談内容を記録に残すために憶えている限りのことをメモした手紙を提出させ、その上で、⑤ロールシャッフ検査 (Rorschach test) を行った。

しかし、この研究方法にはいくつかの問題点があった。(ア) 選抜された学生の大部分からはロールシャッフ検査で好ましい結果が得られなかったこと。(イ) 高安定度スコアの学生は独善的で怠惰でヤル気がないゆえに GHB とは言えないこと。(ウ) 創造的で将来性のある学生 (my most creative and strong and promising people) の何人かは安定度スコアが高くなかったこと。(エ) 男子学生よりも女子学生 (それも美人) を選抜する傾向があったこと。(ホ) 被験者としては大人の方が好ましいが集めるのが困難であること。(オ) 選抜手法としては精神分析学 (psychoanalysis) によることが唯一有効的と思われるが、誰もが何らかの神経症傾向にあるとしたら、GHB の範疇に属す神経症の程度を確定しなければならないこと。(カ) 外部にうまく適応 (adjusted) していなくても大変立派な人々もいるので、GHB の特徴を総括的ではなく局面的に取り出すこと (picking apart various qualities) が必要であること。(キ) ロールシャッフ検査、精神医学的な面談、精神分析学、主題統覚検査 (TAT)、基本欲求の充足度、達成度とその質、などの諸手法によって得られる良き適応状態 (good adjustment) の集団は部分的に重なったりズレたりすること。(ク) GHB の型は唯一というより多様であり (different types of GHB rather than just one type)、それぞれが類似したり異なったりすること。(ケ) 選抜する側の価値観 (the picker's values) に問題があること。(コ) 明白に心身症でないこと (no neurosis, psychosis, psychopathic personality, or obviously psychosomatic diseases) が選抜の最低要件 (at least a minimum requirement) になり得るが、この基準では好ましい人を排除し、嫌な人を選抜することがあること。(サ) 何年か先に追跡的な調査が必要であり、その場合被験者を様々な事情の中で見ること、等。また、20歳の学生が将来 GHB となる可能性はないかもしれないし、表層的な心理学手法で人間の深層部を果たして掴めるのかも分からない。彼らが結婚し、子供を持ってからしか判断できないのかもしれない。そこで、50～60歳以上の自己実現した大人の研究 (studying self-actualized adults over fifty or sixty) から得られた共通する特徴点のリストをもとに、外見が類似し同様の特徴を一定程度もっている若者を選抜した。

[同年5月14日]¹⁴⁾……選抜された学生達は高い安定度スコア (higher security scores) を示していたが、GHB であることとは異なっていた。

[同年5月24日]¹⁵⁾……健康であることは所属社会の文化的価値を受容することであると考えてきたが、しかし文化的価値が受容に値しない場合もあり、健康であることはその価値に反抗することであるかもしれない。文化的価値は相対的か、絶対的かという問題 (the question of cultural relativity, absolute values) が浮上する。

[同年6月24日]¹⁶⁾……選抜された学生達の大部分は、GHB として相応しくない欠点 (shortcomings) を有していることが判明した。

[同年8月28日]¹⁷⁾……印象で言うならば、GHB はウイスクンシン大学よりもブルックリン大学の学生達、またプロテスタント白人よりもユダヤ人や黒人等の方が多い。『Bing Crosby 半生記』は真実か

13) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.81-83.

14) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.83.

15) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.84.

16) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.84-85.

17) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.85.

どうか不明だが、それ自体として採り上げることはできそうだ。あたかも Gabriel Almond によって Andrew Carnegie や Abraham Hewitt 等のリベラル実業家が研究・記述されるのと同じ様に。だとすれば、GHB として初期ユニテリアン派の Parker, Channing, Hamel Martineau について研究するのも良さそうだ。「高德な人 (saintly man)」とは誰かと Stroup に尋ねたら、Martin Buber, Max Weber, Joachin Wach, J. Mecklin の著作を読むように言われた。*Social Science* 誌 (1945 年) に掲載された偉人 100 名 (the 100 Great Men) という記事にも目を通した。

[同年 9 月 4 日]¹⁸⁾ ……以前は性的な悩みを持っていたが、今は結婚を控えて幸せそうで穏やかな女子学生を研究対象に加えた。

[同年 9 月 6 日]¹⁹⁾ …… Bertha は人のもつ習慣上の悪さや欠点は悪しき社会訓練や社会状況に原因があるのではないかと言うが、実際どうであるか分からないので、悪しき環境にある学生は調査対象にはしない。

[同年 9 月 8 日]²⁰⁾ ……調査対象の学生達が GHB 研究に協力的でない (my subjects won't cooperate) ことが明白となった。かつて Ruth Benedict が言い聞かせてくれたように、壮年や老年の GHB がもつ極めて強い「個人的内密性 (privacy)」の感覚が想い出される。彼らは自分のことを色々詮索されるのを嫌う性向をもつが、それは選抜した学生達も同じで、個人的なことを尋ねると倦怠感や嫌悪感を示した。これが GHB の特徴の 1 つだとすると、調査対象であることへの見返りを求めて熱心に協力してくれる人々は GHB とは言えない。自分の選抜した学生達は、褒美などを求めず、純粋に自由に振る舞ってくれた。

[同年 10 月 16 日]²¹⁾ ……学生達に面談や心理テストを行ったが、約束した時間に現れない学生もいた。

[同年 10 月 20 日]²²⁾ ……外見的判断や安定度テスト等に代えて、これまでの全記録を回顧しながら GHB として相応しいと思われる人を選抜するようにした。

[同年 10 月 29 日]²³⁾ ……女子学生達と会うと、いつもながら失望させられる。将来はきっと良妻賢母になるのであろうが、一角の人物になろうとする強い願望がない。

[同年 11 月 9 日]²⁴⁾ ……学生達は相変わらず約束を反古にしたり、遅刻をしたりして、いい加減な態度を示していた。

[同年 11 月 11 日]²⁵⁾ ……選抜した学生達の支配-安定度スコアを記録した昔の得点簿を一覧すると、安定度と GHB との間に相関関係はなく、GHB 概念と安定概念とは異質であることが判明した。学生達の大部分は安定度スコアが中程度であったが、高い安定度スコアを示した学生達は独善的、自己満足的で、無感動であった。過去の得点簿を見ながら、何人か可能性のある学生をリストに加えた。研究を進めて行くにつれ、研究目的がますます薄れていった。数十人いた学生達のうち、当初私の想定した GHB 概念 (my original notions of the GHB) に合致するのは 1 人だけで、その可能性をもつのは数人に過ぎないことが判明した。

[同年 11 月 16 日]²⁶⁾ ……外見から判断して GHB の高い可能性のある女子学生を追加した。また、外見とは別に、高安定度スコアを有する何人かも調査対象に加えた。

18) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.85.

19) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.85-86.

20) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.86.

21) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.86.

22) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.87.

23) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.87.

24) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.87.

25) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.87-88.

26) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.88.

[同年 11 月 20 日]²⁷⁾ ……某学生は面接の約束を何度も無断で反故にした。

[同年 11 月 25 日]²⁸⁾ ……某学生に対してロールシャッハ検査を行った。

[同年 11 月 27 日]²⁹⁾ ……高い安定度スコアの学生を検査したが、陽気で社会的であっても人間的な印象度は低い。一層高い安定度スコアの学生を選ぶことにした。

[同年 12 月 17 日]³⁰⁾ …… GHB の顕著な特徴の 1 つは、Blackfoot Indians が示した「現実をより明確に見る能力 (ability to see reality more clearly)」であると考えようになった。これに関するテストとしては如何なるものを採用したらよいのか。

[同年 12 月 19 日]³¹⁾ ……遺憾なことに、地味な女子学生を過小評価し、可愛い女子学生を過大評価するという誤りを犯した。

[同年 12 月 28 日]³²⁾ ……原罪について Stroup と意見交換した。悪の大部分は欲求不満や困窮の産物であるゆえに、人間は性悪であるとも性善であるとも立証できない。健康な人間といえども、質的な相違すなわち動機・情緒・価値・思考・認知の有り様が異なる。ある意味では、聖人だけがまさに人間であって (only the saints are mankind), 他の人々は病人であるともいえる。

[1946 年 1 月 13 日]³³⁾ ……選抜された学生は GHB としてかなり疑わしい場合が多く見られた。それゆえ、私自身の判断、安定度スコア、対象者の自己判断に加えて、今後はロールシャッハ検査を選抜に利用することにした。中産階級文化の観点からして十分な適応状態にある某女性は、心がまったく腐っている場合があるために、GHB の選抜にあたり「外界適応 (adjustment)」の基準は捨てた。外界にうまく適応していても、健康であるとは言えない (“Adjusted” but not “healthy.”)。

私の指向する GHB 観念とは、少数の自己実現した人々 (a few “self-actualized” people) がほほ示しているような人間性の理想像 (some ideal of human nature) というべきものである。彼らは他の一般人とは大いに異なるところから、動機・認知・情感・思考・価値・ユーモア・パーソナリティ・精神病理等々に関して、異なった理論が必要である。しかしながら、一般人が自己実現人とは異なる本質的な理由はないように思われるので、自己実現人と一般人の人間性とは同義に取り扱うことができる (We may use these people as synonymous with human nature in general because there seems to be no intrinsic reason why everyone shouldn't be this way.)。

また、自己実現人と「神秘的体験 (“mystic experiences”）」との関係についての研究を始めた。神秘家に関する自然主義的な定義と自己実現した人の定義とは近似しているからだ。実際、自己実現した人々の大部分はいわゆる神秘的体験を有している。GHB 以外の人々はすぐ欲求不満になったり、緊張したり、不安になったりするから、GHB の研究にとっては認知実験 (the perception experiments) が有効かもしれないと Werner から助言された。自己実現人 (the self-actualizing man) とは、普通人 (the ordinary man) に何かが付加された存在というよりも、むしろ赤ん坊のように何も奪われていない人々のことであり、他方、一般人 (the average man) とは、能力等が発揮できずに抑圧された状態にある人々のことだといえる。

[同年 1 月 15 日]³⁴⁾ …… Cheney 著の *Men Who Have Walked with God* で扱われているように、社会改革上、孔子は規則や徳育、老子は自然宇宙との一体化を唱道したように、聖人や聖者にも 2 種類以上の対照

27) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.88.

28) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.89.

29) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.89.

30) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.89.

31) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.89.

32) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.89-90.

33) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.90-91.

34) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.92.

的なタイプが見られる。

[同年 1 月 18 日]³⁵⁾ ……神秘家で自己実現人 (a mystic, a self-actualized man) になろうとした超越主義者 Henry Thoreau の伝記を読む。実際の彼は、妻も友人もおらず、リベラルでもなかった。心は優しいが気難しい変人と見なされていた。また、某ヨーガ行者は、友人らに扶養され、妻子や友人との通常の交際も困難で、あたかも寄生虫の如きであった。その彼は、文明の所産は認めるものの、科学は高次の法則を無視していると軽蔑していた。

[同年 1 月 19 日]³⁶⁾ ……自己実現概念の明確化を試みる。種における「理想 (ideal)」や「典型 (typical type)」とは何か。Thoreau は驚は驚らしく振る舞うと指摘するが、それは人間から見た表現ではない。各種動物のもつ行動の動機や目的は、種の本能というべき遺伝によって決定され、各種動物の有する価値は人間種の有する価値とは無関係である。確かに、各種に共通する普遍的な基準として種保存の生殖可能性というものがあるが、私の依拠する基準は、生物分類学で使用されている「種の基準標本 (type specimen)」である。例えば、虎の基準標本について言えば、虎の定義に必要な他の動物とは明確に区別される特徴をリストアップすることである。種の基準標本とは、種の平均そのものというよりも、種の本質を完全に表すものである (the most perfect-in-its-own-kind rather than the most average)。そして、種独自の潜在可能性を最も発展または実現させた (most developed or actualized the unique potentialities of the species) ものこそが、‘最良’の基準標本 (the finest specimen of its type) といえる。それゆえ、人間の基準標本として神経症の人 (a neurotic) を対象とすることはできない。ともあれ、人間の定義を行うとすれば、超文化的な事柄 (a supracultural affair) になることは間違いなからう。

[同年 1 月 21 日]³⁷⁾ ……不適応症候群が様々であるように、良い健康状態の型も多様であること (various types of good health) を認めなくてはならない。選抜した学生達の健康の有り様が外向的であったり内向的であったり、また創造性 (creativity) にしても観念的であったり行動的であったり、またどう見ても健全な人が同時に悩みを持ったりするからだ。50～60 人の選抜した学生達にロールシャッハ検査を行い得るのは 3～5 人程度で、さらに面接調査をすると 2 人しか残らなかった。外部適応・正常性・健康の三者を結びつける概念 (the concept of adjustment-normality-health) について読書と思索を始めた方が良さそうだ。

[同年 2 月 4 日]³⁸⁾ ……ロールシャッハ検査は精神病の診断には有効的であっても、正常な健康人には不向きなのだろうか。私の求めている人々は思うよりも遙かに少数なのであろうか。もしもロールシャッハ検査が信頼できないのであれば、私の調査研究の基盤が失われてしまう。どのようにして、研究対象となるべき GHB 集団を選べば良いのであろうか。ロールシャッハ検査がうまく機能するのは、年齢の比較的高い人々なのであろうか。

[同年 2 月 9 日]³⁹⁾ ……ここ 2 週間ロールシャッハ検査を研究してきたので判定が上手になったが、これぞと思う人になかなか出会えない。Beck の著作に出てくる人で科学者兼大学学長をモデルとして利用できるかも知れない。とにかく、20 歳の子供達からは期待できそうにもない。安定度スコアは、不適応な人を除外するには役立つとしても、ロールシャッハ検査や観察の結果とは合致しないところから、あまり信頼できない。調査研究の対象に、Whitman, Emerson, James, Dewey, Spinoza, Channing, Pascal, Jakob Boehme, Goethe を加える。

35) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.92.

36) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.92-94.

37) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.94.

38) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.94-95.

39) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.95.

[同年 2 月 14 日]⁴⁰⁾ …… Pascal はあまりにも宗教的なので除外する。L. Browne 著の Spinoza 伝記は素晴らしい。最良な人々 (the finest people) として、ハンガリー人の Kepes はある石工と農婦を挙げた。ドイツ人の Werner は最良な人々には野心がないと主張したが、昔 Wertheimer も同じことを言っていたことが想起される。さらに、Werner は大部分の知識人は野心家であったが、例外的に Spinoza は野心的ではない。Beethoven はよく分からない。Wm. James の著作を読む。Thoreau は人生に関し大いに正しい目標と考え方 (the right goals and ideas to a great extent) を持っているが、それに向かって努力しているに過ぎない。Walt Whitman は偉人を装う傾向がある。Goethe はつまらぬ事に執着し愚行が多いので除外する。精査はこれからであるが、完全な人物と思われるのは唯一 Spinoza だけである (Spinoza is the only one who holds up perfectly before scrutiny)。

[同年 2 月 20 日]⁴¹⁾ …… ロールシャッハ検査の最初の 10 人分の結果が戻ってきた。そのうち調査研究の対象となりそうなのは最大 4 人だが、そのうちの 2 人は疑わしい。ロールシャッハ検査に問題があるようだ。

[同年 3 月 1 日]⁴²⁾ …… さらに 6 人のロールシャッハ検査結果が出た。Ruth Munroe がその結果に興味を示したので、私は各対象者における適応のレベルとタイプについて特徴と判断理由を述べた。私が絶対的な基準 (absolute standards) を求めていることに対して、Ruth は文化の有り様いかんによって基準は相対的となるべきだと反論した。

[同年 3 月 14 日]⁴³⁾ …… Jean Christophe の伝記を再読したが、彼のように激しく捻くれて気儘な性格は GHB と呼べるかどうか。Beethoven はモデルになるかも知れないが、彼を判断する基準や尺度が見当たらない。Symonds 著の *Life of Michaelangelo* を読んだが、彼は怒りっぽく、喧嘩好きで、月並みな性格であるというのには信じられない。彼の彫像や絵画の素晴らしいからすると、その性格描写は疑わしいように思われる。

[同年 5 月 22 日]⁴⁴⁾ …… 仕事を一時中断。これまでの GHB 調査からは当惑や失望があったからだ。今学期の学生の中で GHB だと確信できる人はいないが、可能性のあるのは 6～8 人。そのうち 3 人はすべてロールシャッハ検査結果は良いものの、安定度スコアが低・中位であることには驚く。残りの対象者については調査研究を続行する。

[同年 5 月 27 日]⁴⁵⁾ …… 調査対象者の何人かにロールシャッハ検査の結果を知らせて、彼らがどのような反応を示すかを観察した。落ち着いて聞く人もいれば、興味深げに興奮する人もいた。

[同年 5 月 28 日]⁴⁶⁾ …… ロールシャッハの検査結果とその反応について某女子学生と面談した。彼女は初め無関心であったが終わりには恥じらいの様子を見せた。もう 1 人の女子学生に自宅でインタビューした。彼女は背が高くて見目麗しい。彼女は自分のこと、愛しあう家族のこと、幸福な少女時代のことについて詳しく語った。お喋り好きというよりは自己顕示のように思えたが、自分の欠点や弱点を素直に語った。それゆえ、GHB の候補者として選抜した私の当初の印象は概して正しいものであった。その彼女は見かけほどには成熟していない。

[同年 6 月 21 日]⁴⁷⁾ …… ロールシャッハの検査結果と私の選抜印象とは一致しないことが明白となった。とはいえ、ロールシャッハ検査をうまくパスしない学生を GHB 候補者とする訳にはいかない。

40) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.95-96.

41) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.96.

42) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.96.

43) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.96-97.

44) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.97.

45) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.97-98.

46) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.98.

47) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.98-99.

- [同年 9 月 5 日]⁴⁸⁾ ……メイン州から帰ったが、調査研究に新しい発展は見られない。性的適応を喜んで語る女子学生が訪れた。明らかに自己満足的で自信に満ちてはいたが、彼女からは人間的に重要なものが何も得られない。Clark W. Health 著の *What People Are : A Study of Normal Young Men* では、選抜基準が学業成績と肉体的健康であり、正常性は行為の機能的調和という無内容の定義が示されている。
- [同年 9 月 24 日]⁴⁹⁾ ……調査対象者として外見が小太りの可愛い女子学生を選んだ。両親や親戚、男子学生から好かれるタイプである。
- [同年 12 月某日]⁵⁰⁾ ……今学期では調査対象者として選抜できる学生は極めて少なかった。外見も内面も申し分のない学生はいたが。
- [同年 12 月 29 日]⁵¹⁾ ……外見から何人かの学生を追加的に選び、安定度テストやロールシャッハ検査を行った。
- [1947 年 1 月 10 日]⁵²⁾ ……約 180 人の学生の内、選抜できたのは僅かに 3 人であった。
- [同年 1 月 14 日]⁵³⁾ ……ニューヨークの研究スタッフから離れて、カリフォルニアへ出向く。
- [同年 5 月 25 日]⁵⁴⁾ ……カリフォルニアに来てから研究らしいことはしていないが、Else Frenkel-Brunswik との討議は興味深いものがあつた。彼女によれば、GHB は苦闘をしている人か、苦闘を既に終えている人か、のどちらかであると言う。私としては、苦闘をしたことのない人をも付け加えたい。Tolman が GHB 候補者であるかどうかについても討議した。また、S. Holbrook 著の *Lost Men of American History* と C. A. Madison 著の *Critics and Crusaders* を読んだ。そこには、Kropotkin, Wendell Phillips, Altgeld, Eugene Debs など何人かの候補者がいたが、その殆どは変人である。John Brown, Thorstein Veblen, Daniel DeLeon, Wm. Lloyd Garrison, Margaret Fuller, Emma Goldman, Randolph Bourne は候補者ではない。また、おそらく John Reed, Lincoln, Steffens, Thoreau も候補者でないかもしれない。GHB 候補者であるためには、偽善的でないこと (lack of cant), 他人に対しユーモアをもって接すること (sense of humor), 狂信的でないこと (lack of fanaticism), 他人に対し寛容であること (tolerance of others) 等が重視される。しかるに、John Brown, Garrison, Daniel DeLeon は、世界をすべて型にはめて考え、その固定的な枠組みに従って生きているだけで、変転、変化、個人、発展という観念は有していない。
- [同年 6 月 10 日]⁵⁵⁾ ……調査対象者へ質問紙送付の指示とその回収。
- [同年 6 月 12 日]⁵⁶⁾ ……調査対象者として、ここ 4 ヶ月ほど交際のある男性はどうか。彼は精神的に異常ではなく、世の中によく適応し、仕事もうまくこなしている。良き夫、良き父親でもある。犬が好きで、いつも朗らかである。トラックの運転は一流で、上司から信頼され将来を嘱望されている。日曜日に招待してみると、会話もなく退屈であった。しかし、彼は嬉しそうで、快活で、静かな午後を楽しんでいるかのようであった。
- [同年 8 月 20 日]⁵⁷⁾ ……2 週間前、パークレーで Murphy 夫妻と GHB について討議した。彼らは、亭主関白の夫や自分こそ正しいと確信している典型的なりべラル女性は GHB として疑わしいと言った。

48) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.99.

49) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.99.

50) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.100.

51) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.100.

52) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.100.

53) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.100.

54) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.100-101.

55) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.101.

56) Lowry (1973), *An Intellectual.*, pp.101-102.

57) Lowry (1973), *An Intellectual.*, p.102.

彼らの判断は受け入れ難いが、私の判断も彼らに受け入れられないであろう。とすれば、GHBであることを判断するための客観的な事実とは何か。

[1948年2月1日]⁵⁸⁾ ……某調査対象者と5時間ほど面談したが、精神的な異常は見られないがGHB候補になり得る点も特になかった。パークレーのモチベーション研究グループ(Krech等)を批判する論文を読み、そろそろ私の考えを公表する時期が来たように思われる。

[1949年1月25日]⁵⁹⁾ ……McLeodやKrechと議論し合い、文化的に狭い伝統のなかにある某消防士は除外した。

[同年3月某日]⁶⁰⁾ ……旅の途中、コーネル大学で聡明ではないが美貌のいまだ衰えぬ調査対象者と会う。Pop Schrankと会う。Ruth Benedictが他界した。

[同年4月某日]⁶¹⁾ ……自己実現に関する公表論文を執筆。

[同年9月28日]⁶²⁾ ……ブルックリンに戻る。家庭環境の調査をするスタッフを募って、GHB調査研究を続行する。しかし、大学の校務に忙しく疲れ切る。自己実現に関する論文が完成して学術雑誌に投稿したが、査読者からは「あまりにも曖昧だ(Too fuzzy)」と評された。ロサンゼルス在の壮年未婚女性は素晴らしい適応を示していた。GHB候補者の名簿を再確認し、パークレー在の某男性は精神病の疑いから除外。某女性はすこしは良くなったがいまだ健康的でなく適応的でもない。今や隣人となった子持ち女性は良さそうなのでそのうち面談しよう。某女性については、研究スタッフから悪い評価がなされたが、除外の判断は留保した。パークレー在の某男性はちょっとたしなめたら顔を見せなくなった。今は結婚している某女性は正気でない場合が見られる。

[同年9月30日]⁶³⁾ ……ブルックリン大学において外見から選抜された女子学生は、安定度テストや面談等でやや問題があるものの好感が持てる学生ゆえに追跡調査をしよう。他に好感の持てる男子学生もいる。

[同年10月7日]⁶⁴⁾ ……既婚の某調査対象者と1～2時間面談した。子供が欲しくてたまらないのに、夫が子供を望まないことに不幸を感じると話していた。

[同年10月11日]⁶⁵⁾ ……自宅で某調査対象者と長話をした。某女性から調査研究には非協力である旨の手紙を受け取る。某女性調査対象者は家庭環境が極めて悪いにもかかわらず何故素晴らしいのか。

[同年12月20日]⁶⁶⁾ ……私のクラスから最後となる選抜を始めた。1年生からは素晴らしい対象者を、4年生と大学院生からは並の対象者を得た。従来通り、安定度テストと外見チェックを行った。外見はあまり良くなくても安全度スコアの高い場合には面談した。外見の悪い何人かは面談もせずに除外した。面談後に、ロールシャッハ検査とTATの結果に基づき除外した人は僅かであった。かつて神経衰弱になった旨の手紙を寄こした女性と会った。……

ここで、上記の『GHBノート』を整理・要約すれば、次のようになる。

(1) 自ら所属するブルックリン大学の学生に関するGHB研究において、Maslowなりの自己実現人のモデルを事前想定し、50～60歳以上の自己実現人に関する特徴リストをもとに調査研究が行われた

58) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.102.

59) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.102.

60) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.103.

61) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.103.

62) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.103-104.

63) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.104.

64) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.104.

65) Lowry (1973), *An Intellectual*, p.104.

66) Lowry (1973), *An Intellectual*, pp.104-105.

- こと（1945年5月6日，1946年1月13日）⁶⁷⁾。
- (2) GHB 候補者の選抜には安定度テスト⁶⁸⁾ が用いられたが，高い安定度を示していても面接調査の段階で除外されることの多いこと（1945年5月14日；同年11月11日）。また，ロールシャッハ検査もうまく機能しなかったこと（1946年2月4日）。
- (3) 調査対象者の学生達の殆どが GHB 候補者としては不適切であることが次第に判明することで，1945年8月28日以降，自己実現人の大部分がもつ神秘的体験の研究が開始されたこと（1946年1月13日）。さらに，神秘家だけでなくいわゆる偉人たちが研究対象とされたこと（1946年2月9日）。
- (4) GHB（ないし自己実現人）は実際に極く少数であるとしても，一般人をして単に潜在能力を發揮できずに抑圧された存在であるとすれば，自己実現人と一般人との間には根本的な本性上の差異がないこと（1946年1月13日）。
- (5) 自己実現人とは人間の「最良な基準標本」（独自の潜在可能性を最も発展させ実現させている人）というべきで，それは超文化的であること（1946年1月19日）。したがって，GHB は相対的ではなく絶対的な基準によって認識されること（1946年3月1日）。
- (6) 外界にうまく適応していなくても健康的であったり（1945年5月6日），外界にうまく適応していても健康的でなかったりすること（1946年1月13日）もあるゆえに，GHB の特徴は部分的に把握され得ること（1945年5月6日）。
- (7) 自己実現人（ないし GHB）の部分的特徴として，次のものが指摘されること。
- [ア] Benedict が指摘したようにプライバシーの重視や物事に見返りを求めないこと（1945年9月8日）。
- [イ] Blackfoot Indians の如くに現実をより正確に把握する能力のあること（1945年12月17日）。
- [ウ] 神秘的体験を有していること（1946年1月13日）。
- [エ] 創造的であること（1946年1月21日）。
- [オ] Wertheimer が指摘したように偉人であっても Spinoza の如くに野心家ではなく，Thoreau の如くに人生に対する正しい目標と考え方を持って邁進していること（1946年2月14日）。
- [カ] 偽善的でなく他人に対しユーモアをもって接し，狂信的でなく他人に対して寛容であること（1947年5月25日）。

67) 1967年の論文 *Self-actualizing and Beyond* (Maslow (1971), *The Father Reaches of Human Nature.*, Chap. 3 として収録) において，Maslow の想定する自己実現人モデルは，彼が師と仰ぐ Ruth Benedict と Max Wertheimer の2人であることが明言されている。

68) 安定度テストの詳細については，A. H. Maslow (1942) と A. H. Maslow, Elisa Hirsh, Marcella Stein, and Irma Honigmann (1945) を参照のこと。そこにおける Security 概念は，14の項目から構成されている。すなわち，[1] Feeling of being liked or loved, of acceptance, of being looked upon with warmth. [2] Feelings of belonging, of being at home in the world, of having a place in the group. [3] Perception of the world and life as pleasant, warm, friendly or benevolent, in which all men tend to be brothers. [4] Perception of other human beings as essentially good, pleasant, warm, friendly or benevolent. [5] Feelings of safety; rare feelings of threat and danger; unanxious. [6] Feelings of friendliness and trust in others; little hostility; tolerance of others; easy affection for others. [7] Tendency to expect good to happen; general optimism. [8] Tendency to be happy or content. [9] Feelings of calm, ease and relaxation. Unconflicted. Emotional stability. [10] Tendency to outgoingness. Ability to be world-, object-, or problem-centered rather than self- or ego-centered. [11] Self-acceptance, tolerance of self, acceptance of the impulses. [12] Desire for strength or adequacy with respect to problems rather than for power over other people. Firm, positive, well based self esteem. Feeling of strength. Courage. [13] Relative lack of neurotic or psychotic tendencies. [14] "Social interest" (in Adlerian sense); coöperativeness, kindness, interest in others, sympathy. これらのうち，[10]「外部指向・課題指向」および [14]「社会的関心・他者指向・同情心」が含まれていることが注目される。[10] の Insecurity 項目としては Tendency to compulsive introspectiveness, morbid self-examination, acute consciousness of self. が挙げられ，[14] については Selfish, egocentric, individualistic trends が対比項目とされている。したがって，高安定度スコアであっても GHB とは言えないということは，おそらく項目全体にわたるスコアは高くても，[11] と [14] の項目部分において低スコアであったように推測される。

このような GHB に関する調査研究の結果をふまえて発表されたのが、1950 年の論文 *Self-Actualizing People: A Study of Psychological Health* であり、次にその内容と特質をみることにしよう。

IV. 「自己実現人」の共通特徴 (1950 年)

Maslow の研究方法では、まず自己実現人と思われるパーソナリティの特徴を暫定的に指定したうえで、調査研究を何回も繰り返すことによって、その特徴を徐々に洗練していくという「反復的な漸近法 (iteration)」が用いられた。したがって、調査当初の暫定的な自己実現人概念は、次のように漠然としていた。すなわち、「自己実現を大まかに言えば、才能、能力、可能性等を十分に利活用していることとしよう。そのような人々は自己達成をなしとげつつあり、自分がなし得ることに最善を尽くしているように思われる。彼らは、自分にとって到達可能な完全な頂にまで発展したあるいは発展しつつある人のことである。(改行) またこのことの意味は、過去または現在において、安全・所属・愛・尊敬・自尊に対する情緒的な基本欲求と知識や理解に対する認知的な欲求の双方を充足しているか、さもなくば少数事例にあるように、これら諸欲求を‘克服’しているかである。… (中略) …自己実現とは、基本欲求の充足に最低限の才能や能力あるいは‘豊かさ’が加えられたものと言えるかも知れない⁶⁹⁾と。このような 1943 年時点での自己実現概念を当面の出発点とした調査研究ではあったが、調査対象 3000 人の学生のうち、被験者として確実に利用できるのは唯 1 人であり、可能性のある者は 10 数名程度 (1954 年以降の改訂版では 10 数名～20 数名) でしかなかった。

そこで、Maslow が GHB 研究の被験者 (該当者および疑似該当者) として選んだ人々は、次の 46 名であった (1954 年版および 1970 年版ではそれぞれ被験者の追加等の変更が見られるが、ここでは 1950 年版のものを示す⁷⁰⁾。いわゆる偉人・賢人たちが多数を占めたことは、GHB 研究ノートに見られた試行錯誤のプロセス (学生らに対する不信感の醸成) からであり、また特定個人についての検証不可能性の問題があったからである。

(イ) 自己実現の該当者……現代人でかなり確実な者 3 名とその可能性のある者 1 名。

歴史上の人物でかなり確実な者 2 名 (晩年の Lincoln, Thomas Jefferson)。

公人または歴史上の人物で可能性の高い者 6 名 (Einstein, Eleanor Roosevelt, Jane Addams, William James, Spinoza)。

(ロ) 部分的な該当者……現代人で明確な欠点を有するが研究に役立つ者 5 名。

歴史上の人物で何らかの欠点を有するが研究に役立つ者 7 名 (Walt Whitman, Henry Thoreau, Beethoven, F. D. Roosevelt, Freud)

(ハ) 潜在的な該当者……自己実現の途上にあると思われる若者 16 名、および G. W. Carver, Eugene V. Debs, Albert Schweitzer, Thomas Eakins, Fritz Kreisler, Goethe.

被験者数が少数であることから、統計学的に有意な含意を導出することは困難であると考えた Maslow は、これら被験者たちに共通して見られる印象 (impressions) について、諸部面が相互に有機的に関連してひとつの全体を成すという全体論的 (holistic) な観点から、「自己実現人に関する全体的特徴 (whole-characteristics of self-actualizing people)」を列挙する⁷¹⁾。なお、この 1950 年論文の副題にあるように、「自己実現」と「心理的健康 (psychological health)」とが同義で用いられていることに留意したい。換

69) Maslow (1950), *Self-Actualizing People*, p.12.

70) Maslow (1950), *Self-Actualizing People*, pp.12-13.

71) Maslow (1950), *Self-Actualizing People*, p.14.

言すれば、自己実現人とは、神経症ではない正常人のうち心理的健康の状態にある人々のことを指す。Maslow はそうした自己実現人を、『GHB ノート』（1946年1月19日付）で示されたように「最良の基準標本」とみなし、その共通的特徴を14項目にわたって指摘した。

(1) 「現実の知覚がより適切であり、現実との関係がより快適であること (More Efficient Perception of Reality and More Comfortable Relations with It)」⁷²⁾

自己実現人は、あらゆる事柄についてその隠れた複雑な実体を、他の人よりも素早く正確に把握することができる。それは、そこに絶対的に存在しているもの (absolutely “there”) を見出す能力を有するというので、多くの人によってこれこそが実世界だと誤って混同されている既成の概念や信念もしくは固定観念等を超えて、自然の真なる世界 (the “real” world of nature) に生きることができることを指す。彼らは事態の本質を素早く的確に見抜くことができるので、Goldstein の脳損傷患者のように不確実で無秩序な現実に対し戦々恐々とはならず快適な状態でいられる。

(2) 「自己・他人・自然の受容 (Acceptance (Self, Others, Nature))」⁷³⁾

自己実現人たちは、自己であろうと他人であろうと、その本性をありのままに見るのであって、こうあってほしい姿において見ることはしない。「岩が固く、木々が緑であることに文句は言わない」と同じ様である。彼らはあたかも無邪気な子供の如く、物事に対して防衛意識や防衛的装い等はもたず、自分の欠点とも共存している。

(3) 「自発性 (Spontaneity)」⁷⁴⁾

自己実現人たちは、行動と内面の双方においてかなりの自発性を有する。彼らは社会の一般的な因習に表面的に従うことはあるとしても、必ずしも拘束されはしない。すなわち、因習に囚われることなく、自律的で個人的な倫理規定 (codes of ethics which are relatively autonomous and individual rather than conventional) をもって思考し行動する。

(4) 「課題中心的 (Problem-Centering)」⁷⁵⁾

自己実現人たちは、自分自身の外にある問題に関心を集中させる。すなわち、彼らは常に人生の使命 (some mission in life), 達成すべき課題, 責任・義務・責務と感じる仕事にエネルギーを注ぐ。彼らの関心は「自己中心的 (ego-centered)」ではなく、課題中心的であり、人類一般および国家一般の利益 (the good of mankind in general, or of a nation in general) 等に向けられる。彼らは、時間的・空間的にも非常に広大な枠組みで物事を考えるために、周囲の人々から悩みを取り去り、穏やかさを与えるという効果を醸し出す。

(5) 「超然性：プライバシーの欲求 (The Quality of Detachment ; The Need for Privacy)」⁷⁶⁾

自己実現人たちは、孤独やプライバシーを明確に好む傾向がある。課題中心的で自分自身による状況理解 (their own interpretation of a situation) に極度に集中することで愛情の欠如や敵意の表明とも受け取られる場合もあるが、それは物事を客観的に見ようとする超然性に対する世俗的な評価ではない。

(6) 「自律性、文化と環境からの独立 (Autonomy, Independence of Culture and Environment)」⁷⁷⁾

自己実現人たちは、欠乏動機 (deficiency motivation) ではなく成長動機 (growth motivation) によ

72) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.14–16.

73) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.16–18.

74) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.18–20.

75) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.20–21.

76) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.21–22.

77) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, p.22.

って動かされているゆえに、外部や他人から与えられる満足（愛、安全、尊敬、威信、所属）に対しては無頓着である。彼らの主要関心事は、内的な成長・発展こそにある。外的な文化や環境からそのように独立・自律的であるためには、外的な関係を有する基本諸欲求が十分満たされていることが、唯一ではないにしても必要な条件となる。

(7) 「評価がいつも新鮮であること (Continued Freshness of Appreciation)」⁷⁸⁾

自己実現人たちは、人生の基本的事柄について、畏敬、喜び、脅威、さらには恍惚感をもって何度も新鮮かつ素朴に評価・感謝するという素晴らしい能力を有している。例えば、変哲もない夕陽や野花を見てその美しさに感動し没我状態になること等である。

(8) 「神秘的体験、大洋感情 (The “Mystic Experience,” the “Oceanic Feeling”)」⁷⁹⁾

自己実現人たちは、William James の「神秘的体験」、あるいは超自然的なものとは区別される Freud の「大洋感情」と称する主観的経験によって変質され勇気づけられている (transformed and strengthened)。その体験とは「地平線が限りなく眼前に広がっている感じ、これまでにないほどの力強さだが無力な感じ、恍惚と驚愕と畏怖の大きな感じ、遂には何かとてつもなく重要で価値あることが起こったという確信をもちながらも、時間と空間がどこに失せたような状態」を指す。自己実現人はこのような体験を強く感じるのであるが、一般人でも同様の経験を弱く感じることがある。

(9) 「共同体感情 (Gemeinschaftsgefühl)」⁸⁰⁾

自己実現人たちは、人類一般に対して、時折怒りや嫌悪感をもつとしても、同一感や同情・愛情をもっている。それは Alfred Adler のいう「共同体感情」というべきもので、人類皆兄弟という同胞意識である。「人類に役立ちたいという純粋な願望をもつ」ということが一般人に殆ど理解してもらえない異邦人の如くであるが、彼らは Adler のいう「兄貴のような (older-brotherly)」優しい態度で接している。

(10) 「対人関係 (Interpersonal Relations)」⁸¹⁾

自己実現人たちが深い人間関係を結ぶのは彼らと考え方が近い人たちであるところから、その交際範囲はかなり限られている。彼らは親切で忍耐深いけれども、偽善的で尊大な人に対しては相手のためを慮って厳しく接することもある。また、親切で愉快的彼らには賛美者や崇拜者等が近寄ってくるのがよくあるが、厄介な場合にはできるだけ淑やかに避けようとする。

(11) 「民主的性格構造 (The Democratic Character Structure)」⁸²⁾

自己実現人たちは、最も深い意味で民主的である。彼らは、階級、教育、政治的信念、人種や皮膚の色とは関係なく、好ましい性格をもつ人であれば誰とでも友好的に接する。彼らは、自分に何か教えてくれる人や何か技術に長けた人を尊敬し、自分は謙虚でありうる。したがって、友人を選ぶ判断基準は、世俗的なものではなく、その人のもつ性格、能力、才能等による。しかし、同じ人間だからという理由だけで、すべての人間に対して一定の尊敬を有している。

(12) 「手段と目的 (Means and Ends)」⁸³⁾

自己実現人たちは、大いに倫理的で「明瞭な道德基準 (definite moral standards)」を有しており、「正 (right)」を体現しようとする。したがって、目的と手段を明確に区別して目的に惹き付けられる。もっとも、Wertheimer の子供に関する実験で見られるように、彼らは目的に至る過程そのもの

78) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.22-23.

79) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.23-24.

80) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.24-25.

81) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.25-26.

82) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.26-27.

83) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.27-28.

を創造的に楽しむ傾向もある。

(13) 「哲学的で悪意のないユーモア感覚 (Philosophical, Unhostile Sense of Humor)」⁸⁴⁾

自己実現人たちは、一般人の月並みなユーモア感覚をもたない。例えば、誰かを傷つけることで人々を笑わせるような悪意のある冗談は決して語らず、人間の愚かさや尊大さをからかうのである (poking fun at human beings in general when they are foolish, or forget their place in the universe, or try to be big when they are actually small)。Lincoln の冗談が単に人を笑わせること以上に教訓的であったように、彼らの冗談は大笑よりも微笑を誘うのである。

(14) 「独創性 (Creativeness SA)」⁸⁵⁾

自己実現人たちは、天才 Mozart 型の創造性ではなく、精神的健康や基本欲求充足に関連した創造性を有している。特定の人間にではなく、すべての人間に誕生時に与えられる基本的特徴としての潜在可能性 (a fundamental characteristic of commn human nature — a potentiality given to all human being at birth) のことである。それは健康人のもつ人格表現であって、「人が何かをするときは、その人の性格の本性から出てくる一定の態度や精神をもって行うことができる」とされ、例えば靴屋や大工または事務員でさえ創造的になり得るのである。もしも、子供の持つようなそうした自発的な創造性が見られないとしたら、それは文化という枠組みによって抑制・拘束されているからである。換言すれば、自己実現人たちは文化に組み込まれることが少なく、所属文化をかなりの程度に超越している人々をさす⁸⁶⁾。

なお、1950年論文では、これら14特徴に加え、「自己実現人の欠点 (The Imperfections of Self-Actualizing People)」⁸⁷⁾と「自己実現の価値 (The Value of Self-Actualization)」⁸⁸⁾の2項目が付され、自己実現人のもつ消極面と積極面について補足的な説明がなされている。すなわち、彼らは頑固で社会的な丁重さに欠けるところが見られること、また、彼らにとって自己実現は文字通り「自己」の表現であって彼らの最も重視する価値は「特異的性格構造の表出 (idiosyncratic-character-structure-expressive)」であること、がそれである⁸⁹⁾。

ここで、『GHB ノート』での特徴と1950年論文での特徴とを対比すれば、[ア] → (3) (5) (6) (10), [イ] → (1) (2), [ウ] → (7) (8), [エ] → (12) (14), [オ] → (4) (9) (11), [カ] → (2) (3) (4) (11) (12) (13), というように、後者は前者をふまえた展開となっている⁹⁰⁾。そして、1950年の相互関連的な14特徴は、次のように大きく4つに分類することができる(2~3分類とすることも可能ではある)。

[A] 自発・創造：(3) (6) (14)。

[B] 課題中心的：(1) (4) (5) (10) (12) (13)。

84) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.28-29.

85) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.29-30.

86) Maslow (1954), *Motivation and Personality.*, pp.224-228. では Resistance To Enculturation および Maslow (1970), *Motivation and Personality (2nd.ed.)*, pp.171-174 では Resistance To Enculturation: The Transcendence of Any Particular Culture という項目が付加されている。

87) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.30-31.

88) Maslow (1950), *Self-Actualizing People.*, pp.31-33. なお、Maslow (1954), *Motivation and Personality* の以降では、この項目は Values and Self-Actualization と記されている。

89) なお、Maslow (1954), *Motivation and Personality.*, pp.232-234. および Maslow (1970), *Motivation and Personality (2nd.ed.)*, pp.178-180 では、この他の項目として、「自己実現における2分法の解消 (The Resolution of Dichotomies in Self-Actualization)」が追加され、自己実現人においては、情と知、理性と本能、利己と利他、義務と喜び、仕事と遊び、低次と高次、等の2分的対立(対極性)は内的に融合し統一されているという特徴のあることが記されている。

90) 1950年論文では、『GHB ノート』で述べられていた自己実現人の本性と一般人の本性との間に根本的な差異はないという所見に関する敷衍は見られない。

[C] 自他共存的：(2) (9) (11)。

[D] 神秘的体験：(7) (8)。

このようにして、Maslow は、次第に本格的な自己実現概念へアプローチしていくのであるが、『GHB ノート』をふまえた 1950 年時点での概念は、1943 年時点での初出概念とは様相をかなり異にするものであることに注意されなくてはならない。それゆえ、もしも経営学が、Maslow の自己実現概念を援用しようと企図するのであれば、1943 年の初出概念ではなく、むしろ 1950 年論文で提示された自己実現人の諸特徴が反映されて然るべきである。しかしながら、既に指摘したように、1950 年代後葉から 1960 年代の経営学による援用は、1943 年の初出概念（1950 年論文の [A] 自発・創造に相当）に限定されていた。それ以降であっても、残念ながら同様の事態は継続されている。それゆえ、これまでの経営学は、Maslow 心理学に関して御都合主義的な摘み喰いを平然と行ってきたと評しても過言ではないのである。

V. おわりに

Maslow は 1943 年論文において、人間の基本的欲求の主要なものとして「自己実現」という概念を示したが、それは Goldstein 病理学からの借用にすぎず、脳損傷という病的状態にある人間が脅威の外部環境と交渉しながら生存を確保していく様子を表現した用語であった。その当時、病人ではなくて正常人に関する心理学を指向していた Maslow は、彼らが心理的に健康であるためには如何なる条件が必要か、そもそも人間の本来的な性向とは如何なるものであるのかを問うにあたり、「自己実現」という魅力的な用語を利用することを通じて、行動主義心理学や Freud 心理学とは異なる、いわゆる第三勢力としての人間主義心理学（Humanistic Psychology）を企図した⁹¹⁾。

1943 年初出の「自己実現」概念は、Maslow にとって、本格的な人間性研究へのマニフェストというべきものであり、いまだ内容の乏しいものであった。彼は、自らの研究に客観的妥当性を付与するべく、本稿で見たように自分の所属するブルックリン大学の学生達を研究対象としながら、自己実現人の特徴に関する調査研究を 1945 年から 1949 年にかけて行った。調査に入る前に、Maslow の脳裏には自己実現人のプロトタイプが想定されていたが、望まれる自己実現人および疑似自己実現人はなかなか見出すことができなかったところから、その代替として歴史上の偉人達の伝記を渉猟し、そこに描かれている人物像をもとに彼なりの「自己実現」概念の構築を試みた。そうした研究プロセスの所産として発表されたのが 1950 年論文における自己実現人に共通する 14 特徴であり、1943 年の抽象的な概念と比して、かなり異なる具体的な内容を有するものであった。

しかし、その後、Maslow は自己実現概念の内容的豊かさを追究しつつも、彼独自の新しい心理学の樹立のために、自己実現ないし心理的健康を象徴するコア概念を提示するに至る。すなわち、1959 年論文 Maslow, *Cognition of Being* において示される至高体験（the peak experiences）の B 認識（B-Cognition）から導出される「B 価値（the values of Being ; the B-values）」がそれであり、本稿では、この B 価値に至るひとつの主要な経路として『GHB ノート』と 1950 年論文を取り上げたのである。

そして、もうひとつの経路として考えられるのは、1948 年論文 “Higher” and “Lower” Needs や 1955 年論文 *Deficiency Motivation and Growth Motivation* 等である。ここでは、1959 年論文への礎として、

91) DeCarvalho (1990), *History of the 'Third Force' in Psychology*; DeCarvalho (1991), *The Founders of Humanistic Psychology*; DeCarvalho (1991), *The Growth Hypothesis in Psychology: The Humanistic Psychology of Abraham Maslow and Carl Rogers*, および Goble (1970), *The Third Force: The Psychology of Abraham Maslow* などを参照のこと。なお、教科書などでマズロー欲求段階説の説明の際にしばしば三角形図が使われるが、Maslow の著作・論文のなかにはそのような図示は見当たらない。おそらく、Goble の説明図（上掲原著、p. 50）、または Tribe, C. (1982), *Profile of Three Theories-Erikson, Maslow, Piaget*, p.45. を転用したものと思われる。

1943年の欲求5段階説に関して一定の補説と改訂がなされるとともに、B-love概念が提示されているのであるが、このことに関する考察は別稿の課題としたい。

参考文献

- [1] DeCarvalho, R. J. (1990), "History of the 'Third Force' in Psychology," *Journal of Humanistic Psychology*, 30 : 20-44.
- [2] DeCarvalho, R. J. (1991), *The Founders of Humanistic Psychology*, Praeger.
- [3] DeCarvalho, R. J. (1991), *The Growth Hypothesis in Psychology: The Humanistic Psychology of Abraham Maslow and Carl Rogers*, Mellen Research University Press. [伊東 博訳 (1994)『ヒューマニスティック心理学入門：マズローとロジャーズ』新水社。]
- [4] Deci, E. L. (1975), *Intrinsic Motivation*, Plenum Press. [安藤延男・石田梅男訳 (1957)『内発的動機づけ：実験社会心理学的アプローチ』誠信書房。]
- [5] Goble, F. G. (1970), *The Third Force : The Psychology of Abraham Maslow*, Grossman Publishers, Inc. [小口忠彦監訳 (1972)『第三勢力：マズローの心理学』産業能率短期大学出版部。]
- [6] Goldstein, K. (1934), *Der Aufbau des Organismus : Einführung in die Biologie unter besonderer Berücksichtigung der Erfahrungen am kranken Menschen*. [村上 仁・黒丸正四郎訳 (1957)『生体の機能：心理学と生理学の間』みすず書房。]
- [7] Goldstein, K. (1939), *The Organism : A Holistic Approach to Biology Derived from Pathological Data in Man*, American Book Company.
- [8] Goldstein, K. (1940), *The Human Nature in the Light of Psychopathology*, Harvard University Press. [西谷三四郎訳 (1957)『人間：その精神病理学的考察』誠信書房。]
- [9] Hoffman, E. (1988), *The Right To Be Human*, Jeremy P. Tarcher, Inc. [上田吉一訳 (1995)『真実の人間』誠信書房。]
- [10] 金井壽宏 (1999),『経営組織』日本経済新聞出版社。
- [11] Lowry, R. J. (1973), *A. H. Maslow : An Intellectual Portrait*, Brooks/Cole Publishing Company.
- [12] Maslow, A. H., and Mittelmann, B. (1941), *Principles of Abnormal Psychology: The Dynamics of Psychic Illness*, Harper & Brothers.
- [13] Maslow, A. H. (1942), "The Dynamics of Psychological Security-Insecurity," *Character and Personality*, 10 : 331-344.
- [14] Maslow, A. H. (1943a), "Preface to Motivation Theory," *Psychosomatic medicine*, 5 : 85-92.
- [15] Maslow, A. H. (1943b), "A Theory of Human Motivation," *Psychological Review*, 50 : 377-396.
- [16] Maslow, A. H., Hirsh E., Stein M., and Honigmann I. (1945) , "A Clinically Derived Test for Measuring Psychological Security-Insecurity," *Journal of General Psychology*, 33 : 21-41.
- [17] Maslow, A. H. (1948), " 'Higher' and 'Lower' Needs," *The Journal of Psychology*, 25 : 433-436.
- [18] Maslow, A. H. (1950), "Self-Actualizing People : A Study of Psychological Health," *Personality Symposia : Symposium #1 on Values*, Grune & Stratton, 11-34.
- [19] Maslow, A. H. (1954), *Motivation and Personality*. Harper & Row, Publishers, Inc., 1954. [小口忠彦監訳 (1971)『人間性の心理学』産業能率短期大学出版部。]
- [20] Maslow, A. H. (1955), "Deficiency Motivation and Growth Motivation," Marshall R. Jones (ed.), *Nebraska Symposium on Motivation*, University of Nebraska Press, 1-39.
- [21] Maslow, A. H. (1959), "Cognition of Being in the Peak Experience," *Journal of Genetic Psychology*, 94 : 43-66.
- [22] Maslow, A. H. (1962), *Toward a Psychology of Being*, Van Nastrand Co. Inc. [上田吉一訳 (1964)『完全なる人間』誠信書房。]
- [23] Maslow, A. H. (1964), *Religions, Values, and Peak-Experiences*, Ohio State University Press. [佐藤三郎・佐藤全弘訳 (1972)『創造的人間』誠信書房。]
- [24] Maslow, A. H. (1965), *Eupsychian Management: A Journal*, Irwin-Dorsey Inc. [原 年廣訳 (1967)自己実現の経営』産業能率短期大学出版部。]
- [25] Maslow, A. H. (1967), "Self-actualizing and Beyond," Bugental J. F. (ed.), *Challenges of Humanistic Psychology*, McGraw-Hill, pp.278-286.
- [26] Maslow, A. H. (1968), *Toward a Psychology of Being (Second Edition)*, Van Nastrand Reinhold Co. Inc. [上田吉一訳 (1998)『完全なる人間 [第2版]』誠信書房。]
- [27] Maslow, A. H. (1969), "Theory Z," *Journal of Transpersonal Psychology*, 1, No. 2 : 31-47.
- [28] Maslow, A. H. (1970), *Motivation and Personality (Second Edition)*, Harper & Row, Publishers, Inc. [小口忠彦訳 (1987)『[改訂新版] 人間性の心理学』産能大学出版部。]
- [29] Maslow, A. H. (1971), *The Farther Reaches of Human Nature*, The Viking Press. [上田吉一訳 (1973)『人間性の最高価値』

誠信書房。]

- [30] Maslow, A. H. (1998), *Maslow on Management*, John Wiley & Sons, Inc. [金井壽宏監訳 (2001) 『完全なる経営』日本経済新聞出版社。]
- [31] McGregor, D. (1960), *The Human Side of Enterprise*, McGraw-Hill Book Co. [高橋達男訳 (1970) 『新版 企業の人間的側面』産業能率短期大学出版部。]
- [32] 三島斉紀・河野昭三 (2005) 「マズロー理論の基本的特質に関する一考察：マレー理論との比較において」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第 66 巻第 3 号, 167-179 頁。
- [33] 三島斉紀 (2005) 「A. H. Maslow の欲求論に関する一考察：正常パーソナリティと基本的欲求 5 分類」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第 66 巻第 4 号, 209-215 頁。
- [34] 三島斉紀・河野昭三 (2006) 「ゴールドシュタインの「自己実現」概念に関する覚書：Maslow 理論の初期的形成に関する一考察」『研究年報・経済学』東北大学経済学会, 第 67 巻第 4 号, 147-161 頁。
- [35] 三島斉紀 (2006) 「A. H. Maslow の「自己実現」概念について」日本経営学会編『日本型経営の動向と課題』千倉書房, 152-153 頁。
- [36] 三島斉紀 (2008) 「Maslow 理論の経営学的「受容」に関する一考察：D. McGregor の 1957 年論文を中心にして」藤本雅彦編著『経営学の基本視座：河野昭三先生還暦記念論文集』まほろば書房, 213-229 頁。
- [37] Tribe, C. (1982), *Profile of Three Theories-Erikson, Maslow, Piaget*, Kendall/Hunt Publishing Company.
- [38] 山下 剛 (2008) 「Maslow 理論はモチベーション論か」日本経営学会編『日本経営学会誌』千倉書房, 第 22 号, 66-78 頁。

※本稿は、平成 19～20 年度科学研究費補助金・若手研究 B (課題番号 19730281) の助成によるものである。